
ちゃれんじ島が燃えた日

柳雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちゃれんじ島が燃えた日

【Nコード】

N7207M

【作者名】

柳雨

【あらすじ】

いつまでも続いた平和な日々、笑顔で遊びまわるちゃれんじ島のしまじろう達…その平和が突如現れた彼ら動物民族キャラクターとは異なる『存在』によって脆くも崩れ去ることを…まだ誰も気づかなかった…。

（前書き）

本作は『しまじろうシリーズ』の二次創作ですが子供向け番組からかなり離れたブラックな内容満載です

読者の皆様、閲覧の際はくれぐれもご注意を…

・多種多様…様々な動物民族が平和に暮らす、この世のどこかにあるという不思議な島『ちゃれんじ島』。

・どこまでも広がる青い空と海…小さな町が多少あるくらいで自然も多く、資源も豊かであった…そんな中、今日も子供達が元気にはしゃいでた。

「とりっぴい、みみりん、らむりん、お待たせー！」

「しまじろうー！」

・虎の子供・しまのしまじろうはオウムの子供・そらのとりっぴい、ウサギの子供・みどりはらみみりん、羊の子供・まきばらむりんと遊ぶため、落ち合った。

「今日は何をするの？」

「サッカーにしようよー！」

「えー？みみりん、おままごとがいいー。」

「ほらほら、ケンカしない。」

・何で遊ぶかで揉める…園児らしく、実に微笑ましい光景だった…。

・そう、『今だけ』は…。

「ん？あれは何だろう？」

「なんだろう…耳鳴りが、キーンってする…。」

・ふと、子供達が耳鳴りがする程大きな『何かの音』を聞き取り、空を見上げると…。

「わあ…大きな『鳥』が飛んでる…。」

・そう、それは…子供達にとっては見たこともない、大きな『鉄の鳥』が頭に生やしたプロペラをバタバタ回転させたり、尻から煙を出しながらいくつも大空を飛んでるという『奇妙な光景』だった。

「町の方に飛んでるよ？」

（…なんだろう、一体何が起きるんだろう…？。）

・しまじろうはこの時、何か言葉では言い表せられない…途方もない『不安』を感じた…。

・さらには大きな花火を打ち上げる筒をいくつも着けた黒い、巨大な船が何隻も海を渡り、海岸に停まる船からは車やバイクが町を目指して沢山走り出す…。

「なんだ？なんだ？あいつらは？」

「顔や身体に毛が生えてないぞ？」

・町の動物民族達は車やバイクに乗る、明らかに自分達と種族が『異なる』見たこともない者達の顔や身体に毛が生えておらず、頭だけ毛が生えており、さらにはヘルメットをかぶっていたのだ。

・そして緑や黒や茶色が混じってる変わった模様の服装を纏い、黒いブーツを履いていた。

・同じ服装の者達は手に黒く光る棒の様な物を持ち、同じ歩幅を合わせ、同じタイミングで『ザッザッ…』と足音を立てて歩き、まるで機械的でどこか不気味ささえ感じられる…。

「君達は何者なんだい？どこからきたの？」

「おじさん達は一体何しに来たの？」

「わたし、はなたん！あなたたちはだあれ？」

「こら、はなちゃん！」

・動物民族の大人も子供も…その中にはしまじろうの幼い妹・しまのはな（はなちゃん）と若い母親・しまのさくらもいたが、どこからやって来たか知らない未知の存在である彼らに興味津々であれこれ聞いてきた。

・そして彼らは『ククツ…』と、不敵な笑みを浮かべながらこう名乗った…。

「…そうだね、君達のような獣臭漂^{ケダモノ}う動物^{ケダモノ}ごときに名乗るは勿体ないが、キチンと名乗るべきか…よく覚えておきなさい…。」

・これから動物民族の平和を壊す者、悪夢を見せる者達の総称…その名も…。

「我々は…『人間』だ。」

・次の瞬間、『パンツ』という呆気なくも耳に残る単調な音が町中に響き渡った途端…。

「…あ、れ？おかあさん…なんだかはなちゃん…からだが、あつくて…ねむい、よ…。」

「な…何…これ…はな、ちゃん？」

・音が鳴った途端、はなの胸から赤い絵の具…否、『血液』が溢れ出し、彼女は息を荒くした後、静かに目を閉じて…二度と動かなくな…った…。

・さくらは物言わぬ屍^{モリ}と化した最愛の娘を必死に起こすが目覚めない…何故なら『死んだ』からだ。

・平和な動物民族には『死の概念』というものが理解出来ない、それゆえに彼女は認めたくは無かった…はなが永遠の眠りについたなど、と。

「將軍^{ジェネラル}…私だ、これよりこの島の『攻撃』ならびに『侵略』を開始する…。」

『ハッ！了解致しました！！』

・『人間』と最初に名乗った偉そうな男…とある軍の司令官はトランシーバーを使い、部下の將軍達に命令を下し、周囲の兵士達にも同様の命令を下した…。

「攻撃開始！！島中の全ての『動物』^{ケタモノ}を始末しろ！ただし…『家畜』^{しよくりよう}になりそうなものはなるべく残しとけよ！！」

「『サーツ！イエツサーツ！！』」

「その命令を待つてましたよ…司令官！ヒャーハアーツ！！」

・そして兵士達は嬉々^{アムス}としながら先程司令官がはなを殺す時に使った黒い棒…否、『銃火器』^{アムス}を住人である動物民族達に向けた。

「ぐああああああ！！」

「きゃああああああ！！」

「嫌ああああああ!!」

・兵士達から放たれた非情なる銃弾なまりの雨が次々と動物民族達を貫き、命を奪う…。

「ヒヤハハハハハ!!」

「俺達は最高の『ゲーム』をやれて幸福ラッキーだぜ!!」

「動物野郎はブチ殺せ!!」

・兵士達は銃声を響かせ、ゲラゲラと下卑た嘲笑わらいを浮かばせ、自分勝手な理由の侵略行動のため、自分勝手なエゴを見せつけながら、動物民族達を射殺した。

『THREE…TWO…ONE…FIRE（発射）!!』

「『ぎゃああああああ!!』」

・海からは船…軍艦が砲弾を発射、空からは巨大な『鉄の鳥』…軍用ヘリや戦闘機がバルカン砲やミサイルで一斉掃射を開始したため、肉片や血液を撒き散らしながら爆風や銃弾で吹き飛ぶ老人・子供といった非力な者達も含めた動物民族達…そして炎に包まれる民家…。

・そこへちようどしまじろう達が帰ってきた。

「火事だ、火事が起きてるよー!!」

「何…何起きたのよ?」

・とりつぴいはパニックになり、らむりんは事態が飲み込めずに戸惑う…。

「しまじろつ…みみりん、ここ怖い…。」

「みんな…。」

・異様な雰囲気になり飲まれそうになり怯えるみみりんをしまじろつは抱きしめながら歩いてくと、そこにあったものは…。

「みんな…『お昼寝』してる…はなちゃんも…。」

・まだ幼児に過ぎない子供達には解らないことだがこれは『死』の眠りなのだが全く解らない…さらに子供達が見たもの、聞いたもの…それは…。

・見たこともない得体の知れない人間が、軍靴くつの足音を響かせながら、火を吹く棒（銃）で動物民族達を眠らせていくという奇妙な光景だった…。

・その中で…。

「…お母、さん…？」

・無残にも衣服を破られ、全裸はだかを晒したまま、胸元の何発もの銃痕から血液を垂らし、地面を赤く染めた…母・さくらの亡き骸だった。

「ひやはははっ♪動物と言ってもなかなかの牝虎オンナだったな♪最高に『ヨかった』ぜ♪」

・ベルトを締め直す兵士の言葉が何を意味するか…子供達には理解出来ないまま、リリースする…。

「おや？まだ動物がいたのか…。」

「オウムにウサギに羊…虎か…。」

・兵士達は銃を突きつけながらしまじろつ達を囲む。

「虎は食用に向かん、先に殺せ。」

「司令官…ハッ…！」

「あ…れ…？」

・複数の兵士達が司令官の指示により、マシンガン掃射でしまじろつを撃った。

「しまじろつ…？」

「な…何寝てるんだよう！早く起きて！逃げようよう！」

「嫌…いやあ…！！！」

・らむりん達は彼を必死に起こすが、目覚めない…目覚めるはずが無かった。

「やれ。」

「汚物は…消毒だあああああ…！」

「ぎゃあああああ！！熱い！熱い！！！！！！」

「熱いのいやだ…やだああああああああああ！！」

「消して！消してええええええ！！」

・さらには火炎放射器で残り三人を焼き払う…三人は熱さの苦しみ、
焼ける痛みにもがき、身体をよじらせながら踊り狂う…。

「ヒャーハツハツハツ！！まるで火が踊ってるみたいだぜ！！」

「いい臭い…焼き鳥にジンギスカン、ウサギのステーキだ…！！」

・兵士達は美味そうな『飯』が出来上がるのを待ちながら、やはり
ゲラゲラと下品に笑う。

・そこへ…。

「これは…一体!？」

・ 恰幅のいい体型をしたしまじろうの父親・しまのしまたろうは隣町までの郵便配達から帰ってきたのでこの惨状を知るのが遅れた。

「しまじろう! ママ! はなちゃん! みんな…みんな…なんで…!」

・ 変わり果てた姿になった我が子、妻、息子の友達の哀れな末路をまざまざと見せつけられたしまたろう…。

「貴様らが…貴様らがやったのか…?」

「ご明答♪ そうだ…我々が『殺した』のだよ?」

・ しまたろうは静かな怒りを沸き立たせながら司令官と対峙…対照的に司令官は笑顔で得意気に語る。

「許さん…許さんぞオオオオオオオ!」

・ しまたろうの怒りは限界点を越え、その胸の内に秘めたる虎の…『野生の本能』が覚醒…筋肉が盛り上がり、鋭い爪牙を生やし、顔つきも野生の虎のソレになり、一気に飛び出した。

「グオアアアアアアアアア!」

「ぎ!?! ぎゃ ああああああ!」

「ば…化け物…グゲアアアア!!」

「な…!?!」

「まさか、無力だと…軽く見ていた動物民族が彼ら『人間』を引き裂き、噛み殺すとは全くの想定外な事態だった。

「う…撃て!!何やってる!早く私を守れ!戦車を…!?!」

「グルアアアアアアア!!」

「次々兵の首が吹き飛ぶ中、司令官が自分の身の保身だけを考えていた時だった、野獣と化したしまたろうが彼に向かって爪を振り降ろ…。

『…っ撃てー!!!』

「うが…!!!?!」

「なんと、戦車が砲弾を発射し…しまたろうの左腕が爆風と共に千切れ飛ぶ。

「今だ!!撃て撃て撃て撃て撃て撃て!!!」

「あがあがががががが…!!」

「さらにはマシンガン、ショットガン、マグナム、ロケットランチャー、火炎放射器などでしたまろうをバラバラにした。

（しまじろう…みんな、な…ダメなお父さんで…すまない…。）

- しまたろうは最後に復讐を果たし切れなかったことを悔やみながら…散ってしまった…。

- ちなみに司令官はあまりの恐怖に白目を向いて気絶、口から泡を吐き、小便を漏らしたという…。

- しまたろうの最後の抵抗虚しく、ちゃれんじ島は人間の手に落ちた…。

- 僅かに生き残った動物民族の扱いたるもの、あまりにもひどかった。

- 『動物が衣服を着るのは変だ』との考えの下、全員裸で暮らすことを強要され、檻に入れられ、『動物園』なる見世物広場に連行され…興味本位で彼らの裸を人間の大人や子供達に晒し、恥辱の限りを受けた。

- また、牛・豚・鶏などの種族は『家畜』と呼ばれ、牛乳や卵を出すこと…挙げ句には屠殺され、ただの肉塊にされて、人間に喰われる。

・元々彼らの資源だった豊かな自然は瞬く間に破壊され、環境汚染の煽りを受けてかなりの自然が汚され、多くの動物民族が犠牲になった。

・このような非道な扱いを受けた動物民族達はやがて言葉を失い、ドンドンと退化の一途を辿り…最後にはとうとう、現在の人間が知る形の本当の『動物』になった…。

・こうして人間はちゃれんじ島の侵略をキツカケに地球上において、動物や自然の『絶対的支配者』となり、世界は発展した。

・時は巡り…平成2000X年。

「うーん…ネタが浮かばない…そういえば昔、御先祖様が『ちゃれんじ島』というしゃべる動物が住むところで大活躍したっけ。」

・とある教育教材のキャラクターの作画で悩んだ時、自分達の先祖が今の自分達を大きく発展させた『ちゃれんじ島植民地化計画』という『血の歴史』を思い返した。

「…よし！これはいける！」

・しかし、彼は『血の歴史』の詳細や被害者をあまりよく知らない世代であった…そのためこれは偶然か？作り上げたとある『キャラクター』はあの『虎の子供』に酷似していた。

「名前は『しましまとらのしまじろう』だ!」

・これがしまじろう誕生の裏に隠された『秘話』であり『真実』であつた…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7207m/>

ちゃれんじ島が燃えた日

2011年5月19日21時37分発行